

「南米アマゾンの旅」 齋藤晃（国立民族学博物館教授）

(1) 川を航行する 2018年11月10日刊行

南米の中央に位置するボリビアは、日本ではアンデス高地の国として知られているが、実際には国土の3分の2は熱帯低地である。南米を東西に貫くアマゾン川の流域はボリビアにも及んでおり、そこでは高温多湿の気候のもと、森林と草原が広がり、無数の川が蛇行している。

ボリビア・アマゾンでは道路網は発展途上である。しかも、雨期には土地の大半が水没してしまうため、移動経路として河川が重要である。地元の人々はもっぱら丸木のカヌーを使って川を行き来する。漁労に出かけるときや隣村を訪れるときカヌーが活躍するが、農作物を都市で売るため、数日ばかりで川をさかのぼることもある。

川の航行はとても時間がかかる。オール为推进力は弱く、カヌーは遅々として進まない。船外機付きの船なら速度は格段に増すが、川が大きく蛇行しているため、走行距離のわりには目的地に近づかない。川岸の風景はどこも似たり寄ったりで、同じところをぐるぐる回っている錯覚に陥る。

それでも、川の旅は楽しい。水の上はひんやりして気持ちがいいし、蚊もほとんどいない。乾期にはイルカやカメ、樹上のサルや多彩な水鳥が目を楽しませてくれる。なによりも、どこまでも続く広大な川と森が、旅心を刺激してやまない。



雨期の村。増水した川が近くまで迫っている＝南米ボリビア・ベニ県モホス郡で1995年2月、筆者撮影

(2) 草原を横断する 2018年11月17日刊行

南米ボリビア・アマゾンの中央には、モホス平原と呼ばれるサバンナ（熱帯草原）が広がっている。日本の面積の半分に相当するこの広大な原っぱは、ほとんど起伏がなく、雨期には6割以上が水没する。それゆえ雨期には、平原をカヌーで横断することが可能になる。ただし、いたるところに背の高い草が茂っているため、船外機付きの船ならエンジンを止め、草をかき分けながらゆっくり進まなければならない。

乾期になると、水がひいた平原で牛の放牧がおこなわれる。牧童たちは馬を駆って牛の群れを追い立てるが、この馬が乾期のあいだ重要な移動手段となる。筆者の経験では、馬に乗るのはオールでカヌーを漕ぐより容易である。後者は熟練が必要だが、前者については、手綱を進行方向に向けるだけで馬が勝手に進んでくれる。

もっとも、馬の旅は快適とはいえない。鞍を背に乗せ、その上に毛布を敷き詰めても、長時間乗馬していると、どうしてもお尻が痛くなる。また、たとえ乾期といえども、日中の草原はかなり蒸し暑い。地元の人はずいぶん夜間に旅することを好むが、注意が必要である。夜目がきく馬は木にぶつかることはないが、乗り手が木の枝にぶつからないような配慮はしてくれない。



牛と牧童＝南米ボリビア・ベニ州モホス郡 1995年12月、筆者撮影

(3) 空を飛ぶ 2018年11月24日刊行

南米ボリビア・アマゾンでは小型飛行機による空の移動が盛んである。裕福な牧場主は飛行機を所有し、それを使って牛肉を都市に運搬し、日用品を買い付ける。また、旅行客の依頼に応じて飛行機を飛ばす旅客運送業者もいる。近年では、定期便を運行する会社もある。

モホス平原は小型飛行機による移動に適している。起伏のない真っ平らな草原は、生い茂る草木を定期的に刈り取るだけで、飛行場に変貌する。実際、比較的大きな町ならだいたい飛行場を備えているが、その実体は単なる放牧場にすぎない。飛行機の離着陸のときだけ、牛を追い払うのである。

飛行機の旅は圧倒的に効率がいい。船や馬で数日かかる行程を、あっという間に飛んでしまう。ただし、制約も少なくない。行き先が限られるし、天候にも左右される。少しでも雨が降れば、小型飛行機は飛ばない。ホテルの窓から空模様をうかがい、パイロットからの電話をいまかいまかと待ちながら、ときには幾日も無為にすごすはめになる。

飛行機の窓から眺めるモホス平原はちょっとしたスペクタクルである。どこまでも広がる緑の大地、うねうねと蛇行する茶色い川、おもちゃのような牛の群れなど、見ていてあきない。



空から眺めた乾期のモホス平原＝南米ボリビア・ベニ県モホス郡で1997年7月、筆者撮影